

世界と闘った

男たち、女たち

2010年 大河ドラマ

「龍馬伝」

脚本 福田靖

制作統括 鈴木圭

演出 大友啓史 ほか

名もなき若者は、その時「龍」になった

「幕末史の奇跡」と呼ばれた風雲児・坂本龍馬 33 年の生涯を、幕末屈指の経済人・岩崎弥太郎の視線から描くオリジナル作品。

土佐から江戸、そして世界へ。龍馬の行くところ、時代が怒涛のように動き始める。いつも自分の先を歩く同郷の天才龍馬への憧れ、妬みは師・吉田東洋暗殺を機に憎しみへと変わり、若き弥太郎を苛む。長崎で再会した二人は衝突を繰り返す中で急接近。「世界の海援隊を作る」龍馬の志は龍馬暗殺の後、弥太郎に引き継がれていく。そして、龍馬の妻お龍や志士たちのパトロン・大浦慶など変革の時代を力強く生き抜いた女性たち、一攫千金を夢見て黄金の国ジパングに乗り込んだ英国商人グラバーなど、魅力溢れる登場人物が新しい龍馬の伝説を彩る。名も無き若者が世界を動かす「龍」へと成長していく姿を、壮大なスケールで描く青春群像劇「龍馬伝」、ご期待下さい。

< 坂本龍馬 > 「世界の海援隊」を夢見た土魂商才の男

土佐藩、高知城下に町人郷土坂本家の次男として生まれた。

坂本家はもともと商家で、龍馬は自由で合理的な町人氣質に触れながら育った。窮屈な土佐藩を飛び出し、幕臣勝海舟のもとで航海術を習得し、長崎で貿易会社を兼ねた政治結社・亀山社中、そして海援隊を組織する。そして、対立していた薩摩藩と長州藩の間を調停し、薩長同盟の締結に尽力。さらに、徳川慶喜の大政奉還を画策し、明治維新を大きく押し進める原動力となった。何者かに暗殺され、「世界の海援隊を作る」という夢半ばにして、33年の短い人生の幕を閉じた。

< 岩崎弥太郎 > 龍馬に憧れ、龍馬を憎み、龍馬を愛した男

土佐藩井ノ口村の地下浪人という低い身分の家に生まれる。幼少の頃より神童の誉れ高く、吉田東洋に入門を許され、後藤象二郎らと知り合い、土佐藩の中で活躍の場を得る。長崎の土佐商会の責任者となり、海援隊への資金提供窓口として、龍馬と交流を深めていく。維新後は三菱商会を設立し、一代で三菱財閥の基礎を築いた。

この僕が、NHK大河ドラマを書くことになったときはもちろん興奮しましたが、その内容が『坂本龍馬』に決まったときはもう体が震える思いでした。

龍馬と言えば、日本史に登場する人物の中でもヒーローの中のヒーローです。一体どれだけ多くの人が龍馬に憧れ、龍馬のように生きたいと願ったでしょう。僕も大学生の時に司馬遼太郎さんの『竜馬がゆく』を夢中になって読み、「自分も龍馬になりたい！」と未来の自分を思い描いたものです。まさか、将来自分が大河ドラマの脚本を、しかも龍馬を書くなんて想像もしていませんでした。本当に脚本家冥利に尽きるというものです。とはいえ、誰もが知っている『坂本龍馬』を大河ドラマで描くのですから、絶対に面白いものを作らなければなりません。しかし、視聴者のイメージをそのままなぞったような龍馬を見せても仕方がない。『竜馬がゆく』が発表されてからすでに46年が経っています。昭和から平成に時代は変わり、今、僕たちは21世紀の世界に生きています。その後の研究で当時は知られていなかった龍馬像も明らかになっています。今、描くべき龍馬は、46年前のものとは違うかもしれません。

僕がいつも目指しているのは、期待は決して裏切らず、でも予想は裏切って展開していく骨太のエンターテインメントです。さて、どんな龍馬を書こうか……。今、僕の中では『龍馬伝』のイメージがだんだんと出来上がっています。

福田靖氏プロフィール

1962年、山口県生まれ。劇団主宰を経て、1996年『BLACK OUT』で脚本家デビュー。主な作品はTVドラマ『HERO』『救命病棟24時』『海猿』『ガリレオ』『CHANGE』、映画『催眠』『陰陽師』『HERO』『LIMIT OF LOVE 海猿』など。NHKでは『R.P.G.』『トキオ』を執筆。この夏秋にはNHK連続ドラマ『上海タイフーン』、映画『20世紀少年』『容疑者Xの献身』が控えている。

「龍馬は何と闘ったのか？」

チーフプロデューサー 鈴木圭

龍馬は五年間で三十回以上の航海をし、地球半周に相当する二万キロ以上を旅しています。そのバイタリティと情熱の源は一体何で、彼は何と闘おうとしていたのでしょうか。「日本をいま一度洗濯いたし申し候」など龍馬の残された言葉の意味するところは、本当は何だったのでしょうか。新しい龍馬伝説を作るスタート地点に立って、課題は山積み、もっと知りたい事だらけで、闘志が湧きます。

ただ一つ分かっていること、それは混沌の中で、一人だけ違う輝きを放つ龍馬のようなリーダーが今こそ求められている、ということです。「ヒーローものを書かせたらこの人」福田靖さんのオリジナル脚本で描く「龍馬伝」。私自身が早く見たくて堪りません。

「ブーツを履いた龍馬」

ディレクター 大友 啓史

MLBで活躍するイチロー選手のプレーをみる度に、思うことがあります。それは、現実に向かって「なぜ？」「どうして？」と問い続ける好奇心と向上心、それが彼の信じられないプレーを支えているのではないかということです。

僕にとっての「龍馬」像は、時代を超えて、なぜかイチロー選手と重なります。有名な龍馬の写真。彼が履くブーツは、当時長崎の居留地に一軒だけあった「トンプソン靴店」で買ったものといわれています。近眼だったという仮説がある龍馬が、流行のメガネをとっかえひっかえしている様子も眼に浮かぶようです。

「なぜ？」「どうして？」 そう問い続けた幕末の向上心と好奇心は一体どこに向かうのでしょうか。ファッションなのか、ビジネスなのか、それとも政治なのか。先入観を捨て、一人の偉大な「青春像」としっかり格闘したいと思っています。

放送予定:2010年1月から、1年間